

現代ドイツ語の悩み

—或るコロキウムの報告—

荒 木 泰

一九六〇—六一年冬学期、ベルリン工科大学 (Technische Universität Berlin) 人文学部に於て “Sprachmoden der Gegenwart, Analyse und Kritik” と題する Colloquium があつた。指導の Prof. Walter Höllerer は野心的な文芸誌 “Akzente” の編集者であり、又詩人として、評論家として、現代ドイツ文壇の前衛をなす人。かねがね学生の間でも評判を聞いていたし、採り上げられたテーマも興味あるものなので、工大に籍はなかったが、特に頼んで聴講させてもらった。出席者は約二十名、工大の学生ばかりでなく、筆者と同じく自由大学の学生も少くなく、美術大学からも来て居り、いずれも特にこのテーマに関心の深い人達の集りという感じがした。それ丈に報告や討議もなかなか活潑であり、雰囲気も楽しく、遂には週一回のこの時間が、ひどく待遠しく感じられた。単に参加者として以上の興味は、やはり外国人として、ドイツ人がドイツ語を如何に感じ、如何に批判しているか、という点にあつたといえる。ドイツ語というものを、そのあるがままに受け入れる他ない外国人と異り、ヘララー教授を始め、

学生達には、ドイツ語を自ら形成していく者としての自負と責任感がある。その反面、ナチ時代・戦後を通じてのドイツ語の荒廢を、冷厳な現実として受けとめ、自らの切実な問題として闘わねばならない。正負就れに対しても、こうして自分を積極的な姿勢に置かねばならぬ、という意識が、このコロキウムに明確な主流をなしていたのは、直接肌で感じられる空気であった。

進行は、参加者の報告、討論、教授の論評、質問といった形で進められて行く。例えば予め指定されていた如く、美術大学の一学生が、美術の分野に於ける言語上の *Mode* や *Stil* を顕著に示している様な文献を、幾つか朗読した後、その傾向を指摘する。この場合は先づ美術展の開会式辞が採り上げられた。報告者は、大規模な公的展覧会（制度化されたもの）と、個展乃至画廊展覧会の二つに大別し、前者の式辞者として、政府高官・市長・博物館長等の官吏、後者には批評家・芸術家・友人等の私人が主としてその任に当り、両者の式辞内容には文体的に明確な相違があるとした。前者の場合、式辞の導入部は儀式的性格を持って居り、感謝・喜び、といった儀礼形式の型にはまった挨拶に始まる。さて主文に来て次から次と現れるのが

die Moderne, das Abstrakte, das Schöne, das Gute; Kubismus, Expressionismus, Schönheit, Wesenheit, Reinheit, Klarheit……その他 — ismus, — heit, — keit 語尾の多くの語である。又、この様な場合、殆んどモーメントな修飾語として、

interessant, enorm, phantastisch, einzigartig, beispiellos, erheblich, grandios, unvorstellbar, unvergleichlich……

或は生の感情表現として、

angenehme —, unangenehme —, verzweifelte —, schreckhafte —, dümpfe —, lastende Bilder……

“Farben blühen auf als wäre sie Zeugnisse sehter glücklicher Stunde.” など、typisch な表現と見える。更に、他の分野からの借用語が多くの目立つ。とつて、物理学者から、Gewichtsverhältnisse, Kräfteispiel, Bewegungsmoment, Spannungsverhältnis, Kräfteverhältnis, Volumen, positiv, negativ……音楽の領域から、Harmonie, Tonsatz, Kontrapunktik……言語方面から、Akzent, Aussagekraft……

これ等の言葉を到る処に織り込みつつ語られる内容が、das Wesen der Kunst とどう様な、甚だとりとめないものであり、結局は何かが語られただけであり、少くとも式辞として要求される嚴肅さと華やかさ、それに深遠さを印象として残し得れば、内容に關係なく役目は充分果たしたことにされる。

これに反して、今一つの型に属する式辞は、専門的又は個人的知識の豊富な私人によって語られ、個性的な文体を保持している。その文例として選ばれたものが甚だ面白い。

——一九五七年九月七日、Galerie Hella Nebelung に於て Hann Trier 氏（ベルリン美術大学教授）個展に際し、美術評論家通称 Fabri 氏の開会式辞。——

Nur Eunnuchen denken mit dem Kopf, nur Siere denken mit den Hoden. Was das mit Trier und dieser Ausstellung zu tun hat? Zunächst so gut wie nichts. Ich tröste mich damit, daß sich schlimmsten Falls mit allem ein wenig Musik machen läßt. Erlauben Sie mir also noch eine Weile mit diesem Satz herumzuspielen.

Nur Eunnuchen dächten mit dem Kopf, nur Siere dächten mit dem Hoden, sagte ich. Und? Nichts “und”! Eine Art Erpressungsmanöver! Ein satz, der Sie antihitisch in die Zeuge zu nehmen versucht! Die reine Idee, und die reine Explosion! Zu fern von seinem Körper denken und zu nah an ihm!..

..... Wobei sich übrigens noch bezweifeln läßt, ob diese beiden tatsächlich Gegensätze sind. Doch entschieden verschieden eine Portion Schwellkörper ins Ding an sich und in der Erkenntnis a priori! Doch entschieden etwas Begriffliches im Die-Hörner-Senken und Aufs-rote-Tuch-Losgehen! Also Pirouette! Mit den Gegensätzen Karussell fahren! Da das was man als Gegensätze ausklammert, eben dadurch im Gegensatz mächtig wird, tun sie es sowieso. Am liebsten ist der Teufel bekanntlich bei Heiligen tätig. Der Lärm in der Einsiedlei der Thebais überschallte den Großstadtlärm von Alexandria. Assonanzenken. Kehlkopfsyllogismen. Furcht macht die Logik doch höchstens den Logiker. Auch Atemzwänge sind Denknotwendigkeiten. Und Trier und diese Ausstellung? Noch ein wenig Geduld: ich komme nämlich gerade in die Verlegenheit, Schiller zitieren zu müssen. "Ernst sei das Leben, heiter die Kunst," meint er. Wieso eigentlich? Ernst nehmen kann man doch nur was nicht ernst ist. Ein zum Sprung geduckter Löwe, eine auf einen gerichtete Pistole, lassen einen keine Wahl. Zu Etwas-Ernst-nehmen gehört Freiheit, spricht Frivolität. (中略)

Ein wenig umständlich, aber ich glaube, wir sind jetzt angelangt: LA JOIE DE VIVRE, heißt der Titel eines Bildes von Picasso. LA JOIE DE PEINDRE würde ich als Überschrift über die Bilder Triers setzen. Wozu mir ein chinesischer Spruch aus der Tang-Zeit einfällt; er lautet so: "Denken, seinen Pinsel bewegen, ohne Absicht ein Bild zu machen; eben das heißt malen." Ein Spruch, der Trier wie auf den Leib geschrieben ist, nämlich genau die Theorie des trierschen Bildes entwickelt. Trier denkt sein Bild, indem er die Aktion seiner Hände denkt. Es hat kein anderes Thema, keine andere Logik,

kein anderes Kompositionsprinzip, als eben die. Trier malt nicht etwas, er malt. (以下略)

ここで、「何等かの専門用語が、他の分野に移植して用いられる、現代の一般的傾向」について、一しきり討論がある。こういう事実によって、實際或る分野に新しい鼓舞を与えることもある。異った角度からの眼鏡を通すことで、様々な現象を全く新しく説明出来ることもある。しかし反面、自己の分野に持っている手段で、正しく云い表せないのであるからには、それは往々にして流謫地の宿りではない、等々。これに対する教授の論評要旨は、「種々な専門語の交換による或る種の危険は私も感じていた。先づ一つの問題が採り上げられる。理工学で“Volumen,” “Raum” といふのは、一定の概念である。これ等が密かに象徴・陰險・譬喩 (Symbole, Metapher, Bilder) に使われてしまう。つまり、概念が譬喩に使われてしまうのである。例えば Flächenvolumen と云う時、これは造形的な転用といえようが、造形の枠を破ったのでなく、あくまで概念の枠を破ってしまったものである。(この語は物理学では不可能な合成であるにもかかわらず、絵画方面に用いられている。) 文学に於ても我々は常にこの様な表現を借用する危険に曝されている。例えば Spannungsverhältnis の如きもので、如何なる解説書にも現れる代物である。誰しもそこから大抵は建築の Spannung を考へる。その言葉をそのまま詩にも適用しようというのである。突如として陰險に化してしまったこの概念を、どうして正しく詩に於てはめることが出来る。これはもはや、対象やその名称を伴った陰險ではなく、抽象概念による陰險の遊戯に過ぎない。いわば、用いる各人にとつての陰語になってしまう。」

この Colloquium を通じて屢々用いられた、表現形式による分類用語を次に列挙してみる。

Humanitätsprache 所謂「人間の領域」に関する表現を、否定的な意味でこう名付けている。das Wesen (der Kunst, des Lebens, der Liebe, ………) die Seele, (同様な繋り方) das Leben, die Menschlichkeit, der

Lebensgeist:.....その他無数に挙げる事が出来る。これ等はすべて、種々な関連で余りにも多く用いられたがために、「使い古された」表現である。余りに多くを語るために、何も言わぬ表現である。哲学者・文学者達が既に充分、意の儘に解釈した、そして今、何等具体的に把める内容がない。それ丈に、確かな具体的な知識なくして、芸術的又は精神的な事柄について語ろうという時、例えば先述の如く、官吏による美術展開会式辞の場合、甚だ都合の良いことになる。美しい言葉で多くを語って、猶且、何も言わなかったと同じ結果になるからである。

Plastiksprache 印象派的な造形語。又は気ままなたとえ、連想的な思い付きである。話者が放縱な場合、丁度頭に浮んだ、特に目立つ効果のある、あらゆる領域の言葉が比喩的に用いられる。“Ein Mann kam um die Ecke” という代りに、“Er schoß wie ein Blitz (od. schlagenerdig) um die Hauskante”の如く表現したりする。このような放縱な言語形式は、特に解説・軽文学・ルポルタージュ等に屢々現れる。

Instrumental-Funktionalsprache 元来工学に用いられる即物的表現形式。これが他の分野に転用されたのが、先出 Spannungsverhältnis の如きもの。その他 Kapazität, Funktion, Komponente 等も然り。果は勝手な合成が行われ、Denkkapazität, Funktion des Essens, Bewußtseinskomponente の如きものまで可能となる。

Administrationssprache 特に官吏・管理職にある者によって用いられる官僚語である。生硬で甚しく実務的、事項・制度が著しく前面に出ている乾燥で組立てられた生気のないものとして響く。多くのパラグラフや指示事項が引用されても場合は猶更である。典型的用語として、gemäß der Bestimmung, zwecks Vermittlung, betreffs ihres Anliegens 等が頻出する。大学の事務用語に官僚臭の強いことは驚くべきものがあるが、一例として、

Soweit seitens der Fakultäten der Testierzwang nicht aufgehoben wurde, erfolgt eine Anrechnung von
Semestern und eine Zulassung zu den Zwischenprüfungen und Prüfungen, für die die Teilnahme an Be-

stimmten Vorlesungen und Übungen gefordert wird, nur dan, wenn die regelmäßige Teilnahme am Unterrichtsbetrieb nachgewiesen ist.

この感じに忠実に訳してみると、

「学部当局より聴講義務の解除されざる限り、学期数算定及び、所定講義・演習への出席を必要とする如き中間試験並びに定期試験への参加許可は、講義類への定期的参加が証明される場合に限り行われる。」という様なところであらう。

Blut und Boden-Sinn 「ドイツの血とドイツの土」が尊奉されたヒトラー時代の有名なスローガンから来ている。当時プロパガンダとして国民に叩き込まれたスローガン用語 Volk, Volkstum, Rasse 等が、今も同じく強い響きで用いられることがある。ナチスは、美しい理念をその一つ一つにひそめていた様な言葉を、すべてナチスの理念の説明と宣伝のため最大限に利用した。これに関連して、アメリカのゲルマニスト George Steiner が *The Reporter* (Feb. 18, 1960) に *The hollow miracle* と題して発表した論文が興味深い。

スタイナーに依ると、戦後のドイツ語は見る影もなく荒廃したとし、これをヒトラー時代のプロパガンダ悪用のせいにしてゐる。即ち、第三帝国時代の言葉の悪用が、言葉の持つ象徴の価値を最低の域にまで引き下げ、今残るものは唯厭悪感ばかり。この卑められた言葉は再び口にすることすらされなくなり、やがてはドイツ語の死滅を不可避なものとする、というのである。この論文は別の機会にはあるが、この *Colloquium* で激しく討論された。或る表現の意味内容は、何時の時代を通して同じものである筈がないこと。言葉が人間をでなくて、人間が言葉を形造るということ。第三帝国時代、彼等の程度の低い信念を宣伝するために、道具とした使ったその同じ言葉を、他の人達が責任を自覚した信念の下に再び高めるということも可能であること。同種の例として、宗教的、倫理的、哲学的に

用いられる概念語が、今日空疎で無意味に響き、殆んど使用に堪えぬまでになってしまったのも、その言葉が使い尽され又は悪用されたからというのでなく、寧ろこれ等の言葉が使われた意義が、もはや信じられなくなった点にある。簡単に云えば、一律に信じられている宗教・倫理・哲学等がもはや存在せず、従ってそれに関する言葉が無意味に響くのだ。この様に考える時、ナチスの言語悪用をドイツ語そのものの破滅に結びつけるのは、鼓張でしかない。概ねこの様な説が討論の主流であった。

Zurück zur Urform 民族的なものを再発見し、古ゲルマンの伝統を育成したロマン派の理念が、今日のドイツ語に猶面影を残して、繰り返し浮び上って来る。これとて、もはや信じられているのでなく、言わんがため、デモシストレーションするため、そして現代的芸術の権利をそこから奪いて来る手段として用いられるに過ぎない。

Der westdeutsche Intellektuellen-Stil 他の項目と対等に並べられる程一般ではないが、やはり目立った形態である。年一回、Darmstadt に学者・作家等が集って、現下のテーマ、例えば「現代の人間と環境世界」といったテーマで話し合う。その言葉の形式が、屢々極めて気むつかしく、文法的な型にはまっているのが特色であり、文中に文法的関係が重り合い繋り合って、しかも名詞化された動詞が頻繁に現れる。講演の内容は一見客観的であるが、哲学的な言葉の遊戯を加えて、本来の主題を回避する所、先の開会式辞の場合と類似点がある。

以上の様な様々の様相が、或は対立しつつ、或は相組しつつ、就中、新聞・ラジオ・テレビ等のマスメディアを通じて、人々の意識を形成していく。逆に見ると、ヘラー教授の言う如く、「言葉を分析することによって、意識のあり方を分析することが、このコロキウムの主眼」ということになる。

ここまでの所では、象徴世界と、技巧のために用いられる装飾的なものとの背反が問題とされた。この構成は一方

でセンチメンタリズムに支えられ、他方で工学的隠語に支えられ、第三に似非親近性に支えられている。そこには確とした生命の感情が存在するとは思われない。印象に溺れるか、工学的陰険を持ち出して、如何に up to date であるか、如何に此等すべてが今日の技術化された世界にぴったり適しているかを示そうとする。精確な記述の代りに、又してもスローガンを出そうとするのである。という様な激しい批評から、転じて次は文学上の新しい文体に移って行く。戦後特に注目される形式がある。実用主義的、明瞭、簡潔、即物的で冷静なこの記述形態は、恐らくあらゆる幻想を容赦なく吹き払ってしまった戦争の結果的産物であると考えられる。代表的なものは、特に短い Borchert-Stil 例えば “Draußen vor der Tür” などである。これまでの多面的・暗示的な文体諸様式に対して、この即物性と簡潔を備えた言葉は、正に反対方向を指すものである。

Rums! Da! Weg ist er. Reingesprungen. Stand zu dicht am Wasser. Hat ihn wohl untergekrigt. Und jetzt ist er weg. Rums. Ein Mensch stirbt. Und? Nichts weiter. Der Wind weht weiter. Die Elbe quasselt weiter. Die Straßenbahn klingelt weiter. — Draußen vor der Tür, Vorspiel —

一方では人気大衆作家の Hans Hellmut Kirst あたりにも、明かにこの傾向は見える。

Feders lag auf dem Rücken. Der Morgen war bleigrau und dumpf. Der schwere Geruch der Nacht hatte noch im Raum. Der Hauptmann schloß die Augen. Sofort schienen die Morgengeräusche lauter und heftiger zu werden: Wasser, das auf den Körper gespült wurde, während geschätigte Hände die Haut rieben. Seife, die aufgeriffen und abgelegt wurde — ein Handtuch, das zu Boden fiel, Schritte von nackten Füßen. — Fabrik der Offiziere —

文学とジャーナリズムとの関連も見逃せないものがある。ドイツで最も大きな発行部数を持つ新聞・雑誌は

“Welt” & “Frankfurter Allgemeine” よりも、数等程度の落ちる絵入新聞やグラビア雑誌の類である。最も広く読まれる丈に、言語面での影響力はあなどれない。元来二、三流紙の記事の調子は、当節流行の本格文学の文体から影響された形跡が甚だ濃いものである。一般にセンセイションを狙うどぎつい現覚的表現と、大衆の安価なセンチメンタリズムに働きかける調子とは、何処も同じく常套手段であるが、そのためには激越な言葉の選択だけで足れりとせず、文の叫喚のためには、句読点をも最大限に利用する。或はキルストが流行作家になると、早速必要以上に Punkt を用いたコマギレ文体がこれら新聞・雑誌に氾濫する、といった調子である。

Mordkommission jagt die Täter

Unfabbar! 2 Kinder in brennender Kiste eingesperrt

Verzweifelte Hilferufe

—Bild Zeitung, 29. Feb. 60—

発行数三百万を誇るこの新聞は、これ丈の見出しと写真とで第一面の殆んど半分を飾っている。下線の部分は、おまけに赤線のアンダーライン入りである。肝心の子供はどうなったかは、小さい活字の本文を読まないと判らない様になっている。

更に現在の大衆の嗜好は Exotismus である。

その一つの変形として、比較的近い歴史の中に、エクソティスムスを感じさせる様な物語、例えばナチの迫害・戦記物・東西スパイの闘い等が、歴史的報告の形で好んで書かれるのも、地上に未発見の土地とてない今日、エクソティシユなもの欲求を充すことになろう。或は大衆読物に於いて、何等かの形で外国を取扱う傾向も非常に強い。中級家庭雑誌 “Praline” の一冊を例にとると、約百頁の間（広告を除いた本文）に現れる外国関係紙面は、外国旅

行案内（シチリア）7、外国通信又はルポ19、外国が舞台の小説11、その他2となっており、約四割が充てられている。この雑誌に関する限り、就れの号をとってみても、率は略々同様である。こういう紙面に特に屢々用いられる外国語の影響も、勿論軽視することが出来ない。

最後に、若いドイツ人学生の現代ドイツ語分析を聞くこと、言葉を通じての意識の分析を聞いていると、逆に彼等の意識の在り方が窺える。例えば彼等は、はっきり言い切る。「詩人と思想家の国ドイツは、言葉の上で嘗つての哲学的深遠の重荷を負わされている。これはナンセンスのある。何となれば、今日我々は、自分の存在を宗教的・哲学的に根拠づけることはせず、実用的・科学的・即物的にする。従つて情緒・感動・冥想の言葉は相容れぬものである。今日の此岸的・物質的な存在把握に耐え得るのは、厳格に因果律的機能的に論証する哲学でしかない。云々」

「これらすべてにも不拘、あらゆる語彙は未だ存在し用い続けられる。一方には伝統の形式に安住して、一々の言葉が今日適切であるか否かを考えも感じもしない人々があり、一方では重圧に堪えかねて沈黙するより他ない人々がある。象徴主義や表現主義の言語に対する余りにも激しい欲求は、一時破壊的な形で爆發はしたが、はかなくも敗北し去った。今猶独特の言葉と表現に志す者は、自らの心理の裡から發展させて行くため、往々モノログでしかあり得ない。普遍からの余りに大きい距りのため、もはや理解されないか、せいぜい誤解される丈である」「この民族の全体を把むような文学は存在しなくなった。第一に、作家が自己中心に過ぎ、余りにも専門的になってしまつて、小さな島に孤立している。彼等は、まるで別な言葉を喋っている大衆に対して、何等の貫通力をも持たない。第二に、語りかけられるべき当の大衆の側は、聴く時間も関心も持たない。又仲介者たるべき批評家・ジャーナリスト等は所謂ゴチャ混ぜ文体を用い、民衆のスローガン・現代文学的要素・自分の発明など『どれからも少しづつ』という処方で組合せて使っている」「我々の生きている時代は、自分自身のために多くの事をなさねばならぬ時代であり、すべて

に専門化、自己中心他が行われ、個々の仕事を結ぶ調和に欠ける。こうして我々は、精神的バビロンを体験して居り、めいめいが言葉を独立させ、自己の領域に当てはめようとするため、一般を通じると解らないものになってしまっている。我々は言葉で互に掠め合うだけである」

以上が一学期間続いたこのコロキウムで、最も興味深く、又事実上頂点であった部分からのレポートである。全コロキウムがテープに採られてあったためと、同じく出席者の一人 Fraulein Erika Schmitt の協力を依り、可成り細い部分にまで遡って辿ることが出来たことを附記したい。

——終——